

原告団

遺族・CO裁 判、災害責任 追及、特集号

第九十一号

尽きぬ恨み

三池の遺族の一人、大町道子。三池の生きざまもまた、非情の二語につぎ。亡夫から託された二人の男の子もいまはやうと成長を遂げたものの、こころまでいって来た道子は長かった。

文字通り一家の大黒柱だった夫、昌孝さんの命を奪ったあの三池鉦、う輝くばかりの青春の季節を生きていた道子さんは、もう四十四

う幼子だった兄の政信君がすでに二十歳の若者となり、一昨年度に勤めている。そのとき三つだった道子さんの暗かった足もとにも、はじめようとしている。

だが、あの日まだ二十歳といふ輝くばかりの青春の季節を生きていた道子さんは、もう四十四

不幸な夫

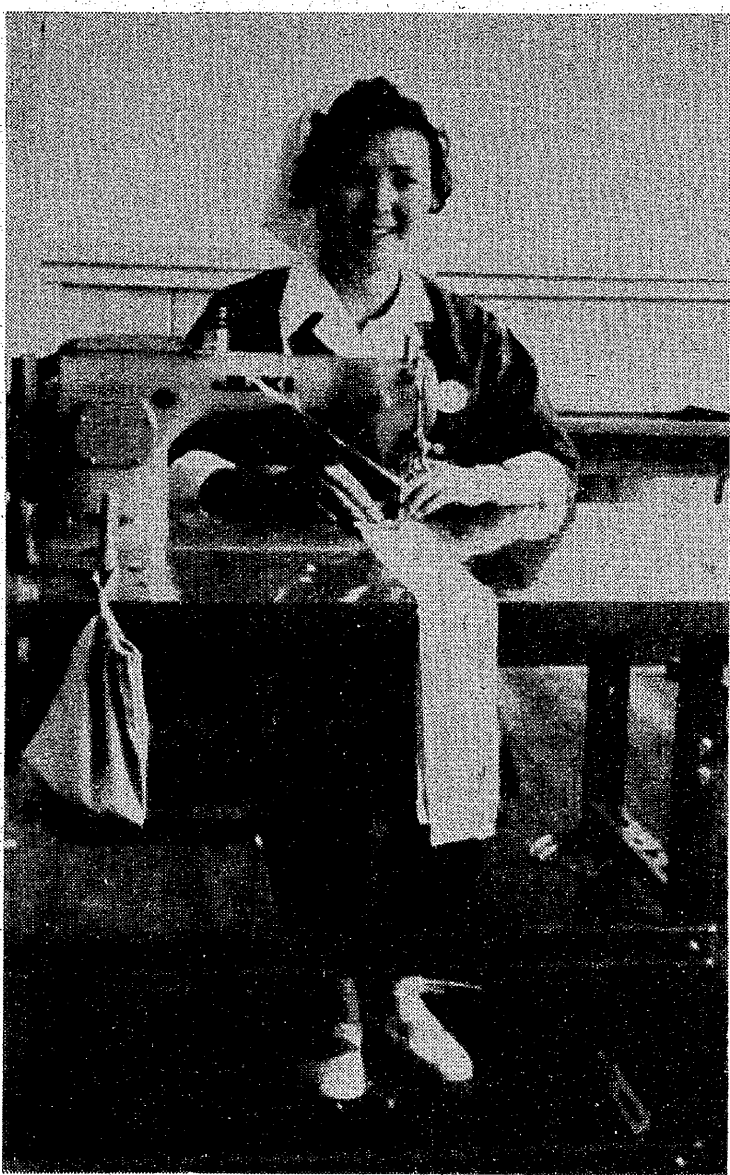
生れは、昌孝さんが昭和七年三月十日で、道子さんが同八年四月



忘れられぬ昌孝さんの面影

原告団レポート

遺族——
大町 道子さん



工場の片隅でミシンを踏む



幼い子どもたちをつれての花見。でも父親はいない。

今からだった「人生」

奪われたしあわせは余りにも大き過ぎた

子どもは立派に育ったが

も燃きついたまま離れることがなうから、道子さんが夫昌孝さんと二人の子ともどもに水入らずで暮らすことができたのは、わずか一年九月に過ぎなかったわけだ。

夢なき新婚

道子さんが亡夫昌孝さんともどもに生きた現在の住まいは、俗に炭鉱住宅の通称で呼ばれる三井鉦山鉦住宅。広大な地帯で、はるか向うの方までずり並んで建つ二階建て長屋の一隅にある。

夫の死後は

三井鉦山鉦住宅のとき、亡夫昌孝さんの遺体が坑底の炭じんの下から掘りだされ、三井大病院に収容されたのは、爆発からすでに六時間以上もたった十一月十二日の午前四時頃のことだった。

叔母とその二人の子ともども、とうとう多数のなかで、まるでひじめき合うようにしながら暮らすことになった。新婚の夢どころではなかったのである。

く「けんよ」としかかると、その子どもから返って「なんね、母ちゃん泣いてるじゃなかね」とやめてくれた道子さんだった。いつまでも泣いていては許されなかった。亡夫から託された二人の幼な子たちは、なんとして立派な人間に育てなければならぬ。

翌一三十九年春、遺族の生活対策のためとして誘致された企業の一ツ——三池縫製工場がスタートすると、さっそく入社。ミシンを使っての縫製の手ほどきから身につけなければならなかった。

追う思い出

いま、道子さんの緊張つぎの脳裏にも、夫昌孝さんとともに生きた日々思い出がいつそその影を濃くしながら、よみがえってくる。

三池闘争中、機動隊の一員として、特別の任務を帯びながら活躍していた昌孝さんのヤツケ姿。過労がたたったか、就労後肺浸潤をわずらい長い入院生活をのびこる余儀なくされた昌孝さん。身を砕いた、自分自身のこと。

子供たちも

子どもたちも、偉かった。家計の苦しさがいかにわかってくると、二人はいつと知れず新聞配達をはじめた。

最初は弟の浩二君からはじめたというが、政信君も高校を卒業するまで新聞配達をつづけた。

許せぬこと

道子さんは語る——

「主人は、ほんとにこれからでした。家計こそ貧しくとも、やうと人間的なしあわせがわたり、うとしていたあの人がしたから、思えば切なくて……。ですから私は、ときには子どもたちをきき離しては、会社への抗議の座り込みにも参加し、または三池遺族会のタスキをかけ、子どもの手をひきながら、カンパを呼びかけるために松屋の角にも立ちました。

工場では、また一心不乱にミシンを踏むつづいて道子さんに、泣く子を「男の子だけん、泣く」向かって、保育所から「そり」

「かぜをひいて、こんこん咳をしながらも欠かすことができず、新聞配りにていく子どもを見て、いつかかわいそうに……。と思ひます」と、道子さんは目をうるませる。

「主人は、ほんとにこれからでした。家計こそ貧しくとも、やうと人間的なしあわせがわたり、うとしていたあの人がしたから、思えば切なくて……。ですから私は、ときには子どもたちをきき離しては、会社への抗議の座り込みにも参加し、または三池遺族会のタスキをかけ、子どもの手をひきながら、カンパを呼びかけるために松屋の角にも立ちました。